

相手に語り掛けながら優しくマッサージをする看護師の小池宜子さん。患者の気持ちが和むよう、言葉遣いは方言丸出しだ。五泉市の南部郷厚生病院「郷和」



五泉市の南部郷厚生病院緩和ケア施設「郷和」。

看護師の小池宜子さん(四六)は部屋に入るなり、患者に「あんべえ、なじら。足さするよー」と気さくに声を掛ける。調子は悪くない。まばたきでそう返した女性患者の足首を、丁寧にマッサージしていく。

病棟では、きょう一日の過ごし方を決めるのは患者たちだ。看護師は、それを実行に移

### 癒やす看護

## 患者の安心感第一に

### 親身な対応 気持ちと和ませます

すための段取りを考え薬を塗って、ガーゼを当て、オムツもついでに取り換えるなら四、

がんが脊椎にまで転移し、衰弱した患者が「風呂に入りたい」と言い出した日がある。小池さんら看護師数人は、まず「せーの」

の合図で体を持ち上げ、ゴムシートをベッドに敷いた。すかさず

蒸したバスタオルで体を挟み込み、タオルが温かいうちに何度も交換した。蒸し風呂同様の感覚に、患者は「無理だと思ったのに…」と感激した面持ちだった。

人手を生かし、短時間で一挙に作業をやる。が持論。傷口を洗い、

もう片方の手を妻に握らせた男性は「おれ、死ぬよ。今までありがとう」と言い残し、翌日亡くなった。

研修に呼ばれる機会が増えたが、小池さんは「専門病棟でなくてもできるケアは多い」と力説する。例えば、高熱を出した患者のベッド脇にさりげなく水を置き、熱が下がったら「私もうれしいよ」と言葉で伝える。

「感情があふれ出るなら泣いた方がいい。患者さんが『自分をいつも気に掛けてくれる誰かがいるんだ』と思うような看護師であってほしい」と若手に訴えている。

「さようなら」を告げると、眠れない様子の男性が「死んだらどうなるかねえ」と尋ねてきた。「どう思いますか？」と問い返しても黙っている。小池さんは正直な思いを口にした。「私はこの仕事でたくさんの人に出会い

# すみか

居場所 求めて

相手は語り掛けながら優しくマッサージをする看護師の小池宜子さん。患者の気持ちが和むよう、言葉遣いは方言丸出しだ。五泉市の南部郷厚生病院「郷和」